

人と犬の性格マッチングについて

立田有羅

本研究の目的は、人と犬の性格の相性を解明し、人と犬の相性判定モデルを構築することである。質問紙調査を実施し、その結果を解析した。

人間と犬は、1万年以上に渡り共存してきた特別な関係を持つ生き物である。現代では犬は単なるペットではなく、人間の生活や感情に深く関与する存在となっている。特に近年では、犬が飼い主の精神的健康に及ぼす影響や、社会的つながりを深める役割について注目されている。一方で、不適切な性格の組み合わせが原因で、犬の問題行動や飼い主のストレス、最悪の場合には飼育放棄が生じるケースも少なくない。このような問題を防ぐためにも、飼い主と犬の性格の相性を科学的に理解し、適切なマッチングを行う必要がある。

本研究では、家庭内のすべての人に調査に協力してもらうことで、人と犬の相性を、犬とその家庭内の各メンバーとの関係性から見出した。質問内容は、回答者の特性について、回答者自身の性格について、犬の性格について、そして家庭内で犬が誰に懐いているかの順位付けである。人の性格を測定する尺度としては、10項目でBig Fiveの5つの次元（外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性）を測定する、TIPI-Jを用いた。犬の性格は、先行研究から犬の性格を特徴づけると考えられる7因子（興奮のしやすさ、愛着の強さ、怖がりやすさ、自己主張の強さ、反応の速さ、穏やかさ、友好的かどうか）を抽出した。また、これらの7因子について、その対象を分けて質問を行い、その平均をとることで、より詳細な数値を得られるようにした。例えば、「興奮のしやすさ」では、人、食べ物、大きい音など、「何に対して興奮しやすいのか」の対象を複数用意し、それぞれの対象に対して、性格特性の強さを7段階で評価してもらった。その他の因子に対しても同様に行った。

得られた回答結果から、「懐いている」/「懐いていない」の2つのデータを作成し、人の各性格特性スコアと、犬の各性格特性スコアの相関係数をそれぞれ計算した。さらにそれを比較すると、「外向性」と「興奮」の関係に、統計的に有意な差 ($p < 0.05$) が認められた。

また、最も懐いている人として挙げられたのは、「母」が多いという結果が得られた。一般的に「母」は、犬に限らず、家庭内の身の回りの世話を担うことが多い役割と考えられる。このことから、犬が母に懐きやすい傾向は、犬の懐き度が、身の回りの世話をする割合などといった環境要因にも関連している可能性を示唆している。

(指導教員 真栄城哲也)